月報 岡崎の教育

平成7年度 No.263～274

4月号

平成7年4月1日

発行／編集

岡崎市教育委員会

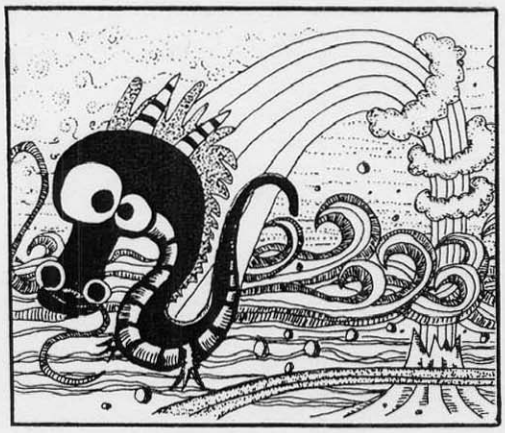
学校につづく桜の坂の道
やわらかい緑の息吹
藤の花房のアクセント
山々にこだまするウグイスの声
青空をつきぬけるヒバリの歌

ちっちゃな瞳で
何を見つめているのかな
ちっちゃな唇で
何を話してくれるのかな
そのちっちゃな心は
何を思っているのかな

こんなすてきな季節の
初めての君との出会い

〈はじめまして〉

（1年でこんなに上達したよー恵田小）



—教育随想—

若者たちへの想い

愛知教育大学教授
池田　勝昭

このところ、私は、若者たちの大活躍に大変驚くとともに頼もしくも思い、大いに期待するものです。昨秋、プロ野球のイチロー選手が、いとも簡単に史上初の二百本安打を達成しました。ノルディックスキー複合の荻原選手は、ワールドカップ三年連続優勝の偉業をなし遂げました。二阪神大震災での若者たちの活躍です。日頃、醒めているともいわれる彼らが、柔軟な思考と敏速で現実的な実行力により、献身的な救援活動をしている姿には、まぶしささえ感じます。

私は、仕事柄若い人たちと接する機会が多くあり、驚いたり、感心したり、腹立たしく思ったり、さらには教えられることも多々あります。今の若者たちは、感性や感覚が大変鋭く、豊かです。思考も柔軟で、実に多様であり、様々な価値観を持っているようです。「明るく」、「軽く」を好み、楽天的に見えますが、芯はしっかりした計算と人生を描いており、なかなか現実的です。

また、他方では、確かに不安定さや未熟さ、自己中心的な面もあるように思いますが、総じて多彩な才能を持ち、純粋で優しく、さらに、たくましさも持ち合わせ、合理的かつ行動的であるようです。もちろん、若者すべてがそうだとはいえませんが、私どもの年代とはずいぶん異なった面が多いように感じます。越え難い時代の差、世代の差を実感しています。豊かな物質文明の世に生まれ、情報化社会に育ったことによる特質といえるのかも知れません。

若者には若者の良さがあり、また、それが現代の若者たちの姿でもあるならば、私どももその長所を認め、尊重し、育てることが務めであると考えます。そのためには、柔軟な思考と種々のことを受け入れるだけの懐の深さが求められることになりますが、これがなかなか大変なことです。しかし、次代を担う若者たちと共に考え、共に学び合う心を持ち続ければ、可能ではないかと考えています。私も、「うかうかしておられないなあ」と思いながら、かつての自分の姿と重ね合わせて苦笑するこの頃です。

（いけだ　かつあき）

人に共通して感じますことは、自分のための努力であり、あっけらかんとした印象さえ受けたものでした。まさに新しい現代の若者像を見る思いであり、新時代の到来かと強く感じると同時に、ある種の妬ましさもあり、複雑な思いをしたものでした。

また、最近心を打たれたことは、

音楽性の基礎を培う

音楽科指導員
和田　実

「曲を聴きながら、手拍子で自由なリズムをたたいてみましょう。」

CDラジカセから曲が流れ出す。子供たちは体を動かしながら楽しそうに手拍子でリズムうちを始める。小学校一年生のリズム創作の授業風景である。子供たちの手拍子によるリズムは、今までに経験したリズムであり、その曲の旋律のリズムであったり、歌詞の言葉のリズムであったりする。子供たちは、無意識のうちにそれらのリズムを組み立てて表現しようとするものである。

リズム創作の授業で大切なことは二つある。第一は、子供の体にあるリズムをどのように引き出すかということである。そのリズムを全員でたたくことにより同じリズムを経験させる。模倣をさせるわけである。

名古屋グランパスエイト 球団代表 西垣 成実 氏

新たに二チームを加え、Jリーグは今年も熱い戦いを繰り広げている。開幕前の三月上旬、地元名古屋グランパスエイトの球団代表西垣さんのお宅を訪ねた。

サッカーを始めた動機は、中学時代に足が速かったこともあってFWをやり、それ以来サッカーの魅力に取り付かれたからだという。芦屋高校時代は、練習が厳しく電信柱に寄り掛かりながら帰ることもあり、おかげで大学一年から全日本のGKに選ばれたそうだ。

球団代表の仕事としては、監督・選手・コーチの指導をはじめ、社員の管理、球場の確保、警察消防との連絡調整などと多岐にわたり、多忙な毎日を送ってみえるようだ。

今の悩みをお聞きすると、

「自分がプレーするのではないので、思うようにいかないこともあって苦しい。特に、去年成績が悪かったので悩みは多い。また、外国人選手は育った環境が違うので、その対応に苦慮することもある。」

と言われる。

次に、地域との関わりを尋ねると、

「『ふれあいサッカー広場』という小中学生を対象としたサッカースクールを年間五十五回開き、ブラジルのプロの指導者をつけ、子供たちにサッカーの楽しさを伝えている。そのスクールの中に、最近運動神経のよい子が集まってきたことや、指導者も増えていることなど、底辺が拡大していて大変楽しみである。」

と、笑顔で語られた。

Jリーグの将来の展望については、世界で最も競技人口が多いスポーツであり、日本のサッカーはまだまだ伸びるし、ワールドカップは日本で開催されると断言される。また、選手が百パーセント力を出し切り、観客が感動する試合をすることと、良いスタジアムを作り、子供たちが楽しくサッカーができるようにすることが課題であり、そうなればよい選手が育つはずであると強調された。

最後に、今年の抱負を伺った。

「ベンゲル監督は知将だ。いきなりトップは無理かも知れないが、徐々に上位にいき、真ん中あたりにはいける。」

はきはきと答えられるところに、スポーツマンらしい爽やかさを感じた訪問であった。

（氏　名　にしがき　なるみ
生年月日　昭和十五年九月二十五日
住　所　明大寺町馬場東一一九）

いろいろなパターンのリズムを経験させることによって、更に次なるリズム創作へのステップとなっていく。

第二に、子供の表現するリズムを聴き取る力を教師自身が身につけなくてはならない。特に、創作の分野では、教師の力量によるところが大きい。リズムパターンは音符の組み合わせによってできるもので、その根本的な部分をどれだけ教師が理解し、聴き取ることができるかが大切である。教師の力量以上に子供の力を伸ばすことはできないものである。

小学校では、音楽は楽しければよいという考えが大勢を占めている。しかし、音楽が楽しければよいという考えで授業を進めていくところに、音楽嫌いを作る原因があるのである。音楽は、できるから楽しいのであり、その満足感の積み重ねから感動が生まれるのである。

子供にとって音楽は楽しいものであるが、高学年になるに従い音楽嫌いは増加する。音楽性の基礎を培うためにも、基礎基本に立ち返った授業をしていきたい。

【推薦する専門書】〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

『音楽の可能性』　音楽之友社
『教育音楽小学校版』（月刊誌）　音楽之友社

学習指導要領に示されている教育理念は、新しい学力観に立った教育を通して、社会の変化に主体的に対応できる心豊かでたくましい人間を育成し、生涯にわたって学習する意欲と能力を育てる教育を積極的に推進することである。

私たち教師一人一人がその具体化に努め、児童生徒の優れた個性の伸張と能力の育成を図り、知・徳・体の調和のとれた人間形成を目指し、最大限の努力をする必要がある。

一　学ぶ喜びを知り、自ら学ぶ態度や習慣を育てる

児童生徒は、だれもが分かりたい、できるようになりたいという欲求を持っている。自らの力で問題が解決できたとき、大きな喜びを感じ、自信を持って次の活動へと発展させるものである。教師は、児童生徒たちに学ぶことの楽しさや成就感を体得させ、自ら意欲的に学ぶ態度の形成を図るために、次の二点に留意して指導したい。

第一は、児童生徒の身近な生活の中から問題を掘り起こし、自分の課題として解決への必要感を持たせる指導を工夫することである。そのため、児童生徒の実態を的確に把握し、新鮮で感動を与える教材の発掘・選択、体験学習の導入、問題意識を持って取り組める学習展開や、意欲的に追究し続け、仲間とともに解決し合う教師支援など、児童生徒の実情に即応した指導の工夫が望まれる。

第二は、基礎的・基本的な知識、技能を定着させるとともに、その過程を通して、学習の仕方を身につけさせることである。このことは、児童生徒たちが自己実現を図り、生涯にわたり人間としての成長と発達を続けていく基盤となるものである。そのために、基礎・基本となる内容を明確にし、創意工夫を生かしながら教育課程を実施しなければならない。また、個性を生かし伸ばすために、個別指導・グループ指導を取り入れたり、ティーム・ティーチングなどの指導方法を充実させたりする必要がある。

二　命を重んじ、礼節を尊び、心豊かな児童生徒を育てる

今日、物質面の豊かさにひきかえ、心の貧しさや道徳性の欠如が叫ばれている。また、命の大切さを再認識させる事件も発生し、大きな社会問

社会の変化の激しい今日にあって、学校教育に求められているものは、知・徳・体の調和のとれた児童生徒の育成と、生涯にわたる学習基盤の形成である。

各学校においては、児童生徒の優れた個性を伸ばし、能力の育成を図り、社会の発展に尽くす態度と社会の変化に自ら対応していく力を養うことが大切である。

岡崎の教師は、教育者としての使命を自覚し、全校一致の指導体制のもと敬愛の情で結ばれた師弟関係を強め、学校・家庭・地域が一体となって、児童生徒の健やかな成長を目指し岡崎の教育の創造に努める。

指導の重点

一、学ぶ喜びを知り、自ら学ぶ態度や習慣を育てる。

一、命を重んじ、礼節を尊び、心豊かな児童生徒を育てる。

一、自らを律し、たくましく生きぬく力を育てる。

題になっている。この現状をふまえ、「命」「礼節」と「豊かな心」を重点に、学校教育のすべてを通して、心の教育に取り組まなくてはならない。

教師と児童生徒及び児童生徒相互の望ましい人間関係が存在しないところに真の教育効果は期待できない。こうした関係をつくるために、「挨拶」「返事」「後片づけ」の励行と「思いやりの心」を育成したい。心の通った明るい挨拶・返事や、他人を気づかい、他人の気持ちになって考え行動する習慣の形成は、人間的なふれあいを深め、信頼関係を築くものである。

「豊かな心」については、前述の指導に加え、児童生徒の心に響く体験活動や自然とのふれあい・奉仕などの体験を通した学習を重視したい。また、豊かな体験に基づく内面に根ざした道徳指導の充実にも努める必要がある。

三　自らを律し、たくましく生きぬく力を育てる

家庭や地域社会における教育力の低下に伴い、自分で自分を律し、たくましく生きていく力を培う必要が生じている。

その第一は、基本的な生活習慣の徹底を図ることである。集団生活をしていく上で必要な基本的なことを、体得できるまで繰り返し指導したい。また、事ある度に善悪の根拠を諭すことも忘れてはならない。その体得及び体験の過程で、自己の規範が芽生え、自律の心が育っていくものである。

第二は、我慢をし、困難に立ち向かう力をつけることである。恵まれた生活環境の中で、我慢する経験が少ないだけに、たとえ失敗しても挫折することなく、最後まで挑戦する粘り強さ、たくましさを身につけさせなくてはならない。このことを、一人一人に即して具体的に目標化し、あらゆる教育活動において児童生徒の日々の姿を注意深く見守り、達成できるよう力強く支援したい。

岡崎の教師は、児童生徒への深い愛情と教育者としての強い使命感・責任感を持ち、たくましい行動力・実践力により児童生徒の健やかな成長をはからなくてはならない。全校一致の指導体制のもと、家庭・地域との連携を密にして、岡崎の教育の創造に全力を傾注したい。

ふれあい

言葉はいらない

コタ・キナバル日本人学校
（マレーシア）
佐野　恵広

本校では、現地校、国際校の二校と交流を行っている。現地校とは文化交流。国際校とは水泳大会。しかし、水泳だけでは児童生徒間の交流ができないので、今年から、大会の後、バーベキュー大会も行うことになった。

水泳大会終了後、両校のお母さんたちが準備してくれたおにぎりやバーベキューをおいしそうにみんなでほおばる。

しかし、いつまでたっても分裂していて、交流にならない。英語が堪能な子は、時々会話をしているのだが、他の子は、なかなか国際校の子供に近寄らない。向こうも日本語が話せないので、やや遠巻きにして見ている。

ところが、突然両校の中学部の生徒たちを中心に相談が始まった。みんなで一緒に遊ぼうというわけだ。相談の結果、手つなぎ鬼と氷鬼をすることになった。母国は違えど同じ遊びはあるものである。

今まで牽制しあっていた子供たちが一緒になって手をつないで楽しそうに走っている。鬼から助けようと汗だくになって走っている。

彼らには言葉はいらない。彼らには共通のコミュニケーションの媒体、遊びがあるのだ。会話や相互理解は後からついてくる。その周りには、つたない英語を駆使し、苦しみながら交流している日本人学校教師陣の姿があった。

師弟同行

一丸になって健康教育に

六名小学校
三木世紫枝

岩津中学校の教育実習で、指導教員としてお会いしたのが、先生との最初の出会いでした。子供とのかかわり方や指導案作り・板書計画などを毎夜遅くまでご指導いただいたお陰で、養護教諭としてがんばってみようという気持ちが湧いてきたような気がします。

縁あって岡崎市の養護教諭となり、西浦先生と身近に接することができるようになりました。指導教員だった時には分からなかった、先生の包み隠しのない性格や、あふれるほどのバイタリティーにひかれました。

その後、市教育委員会の保健の教科指導員として、また、県教育委員会の指導主事として、学校保健の基礎作りなど幅広い分野に力を入れられた先生から、養護教諭のあり方をたくさん学ばせていただきました。

今でも「一丸になって、健康教育に取り組もう」という先生の声が聞こえてくるようです。これからも先生の教えを胸に秘めてがんばります。

一人一人をよく見て

元県教育委員会指導主事
西浦とし子

先生と初めてお会いしたのは、岩津中学校の教育実習でした。何事にも真摯に、積極的に取り組まれた先生のお姿が、今も目に浮かんできます。

お勤めされてからは、保健室が学校保健の要になるよう配慮され、次々に先を見通しての着実な布石に、私は反省することしきりでした。

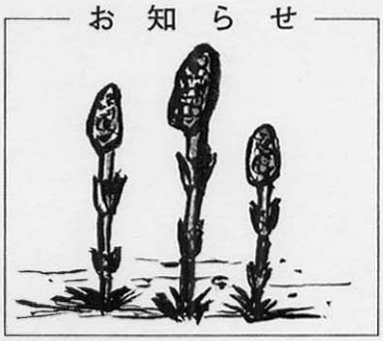
近年、学校保健は、心の健康を重視するようになりました。

単に、頭痛を訴える子も、その背後には、多様な要因が潜んでいるかもしれません。頭痛の処置だけで済みとせず、その子の身になって対処しなければならないと思います。

生きる子供を育てるほど難しいことはありません。でも、何とやりがいのある仕事でしょうか。一人一人の子供を大切にしてほしいと思います。これは、職を辞した今の私の述懐でもあります。

岡崎市の養護部会長は、大変なお仕事ですが、頑張って下さい。先生のいよいよのご発展をお祈りいたします。

お知らせ



◆平成六年度岡崎市読書感想文・感想画コンクール

・市長賞

常南小　一年　柴田　幸紀

竜美丘小　六年　山本　健嗣

葵　中　二年　星野　恭子

・市議会議長賞

常磐小　三年　小野　雄紀

緑丘小　六年　皆川　真弓

附属中　一年　竹中　弘枝

◆平成六年度全国小学生ビデオコンテスト

・審査委員会特別賞

大門小学校四年四組

・奨励賞

秦梨小学校放送委員会

山中小学校三年二組

◆第六回松下視聴覚教育研究賞

・理事長賞

城北中学校

◆第三回全国小学校中学校環境教育賞

・優秀賞

美合小学校

◆小中学生新聞切り抜き作品コンクール

・最優秀賞

矢北中　二年　伊藤　奈巳

矢西小　五年二組

◆愛宕小に表彰楯

日頃からの積極的な火災予防活動の功績が認められ、三月二十八日、東京の日本消防会館において、全国少年消防クラブ運営指導協議会長より優良なクラブとして表彰された。

◆期待の新任教員五十八名

平成七年度岡崎市小中学校新規採用教員は、五十八名（男子十九名、女子三十九名）であり、昨年度より二十六名減少した。

期待の新任教師の氏名と配属は、次の通りである。

《小学校》四十七名

梅園　本多　さおり

都筑　郁代

根石　萩野　博美

加納　有希

緑丘　中村　正子

羽根　加藤　幸広

六名　小原　佳子

大岡　真由美

三島　大矢　由紀子

竜美丘　山本　祐子

加藤　裕美

連尺　板倉　眞介

広幡　重野　由佳

牛田　貴子

浅田　智子

井田　杉浦　一未

小山　美枝子

福岡　富永　和恵

高木　美江

藤川　宮田　和彦

田中　美紀

山中　前川　真紀

本宿　日置　正敏

生平　竹内　康江

常磐南　浅野　知春

常磐東　浅井　佐紀子

奥殿　高瀬　透

細川　山口　秀樹

尾崎　和美

岩津　瀧本　彰恵

大樹寺　佐藤　浩司

高橋　佳子

大門　伊藤　篤史

矢作東　木村　充隆

矢作北　小川　康夫

六ッ美北部　山本　雅子

畔柳　英徳

吉兼　ひな子

杉村　定則

磯合　礼子

常磐　天野　幸輔

矢作　兵藤　輝徳

柳　洋子

矢作北　津久井　美樹

鈴木　淳子

竜南　槌田　進一

安藤　佐文

青山　賢治

《中学校》十一名

甲山　深田　宏明

竜海　相澤　淳子

松井　由紀子

城南

上地

鈴木　美佐

水谷　歌織

川端　啓介

小豆坂

吉戸　三佳

西川　美穂

北野

井上　めぐみ

杉浦　伸也

ズームアップ

藤川小

平成6年度にパソコンVOD教室が完成し、週1～2時間の授業を子供たちは大変楽しく受けてきました。

矢作北小蔵

『身體検査統計表綴』

現代っ子の体位の向上はめざましいものがあるが、この『身體検査統計表綴』を開くと、明治時代の子供がいかに小さかったかよく分かる。

明治四十一年四月の文部省調査による平均身長は、十一歳男子で四・一二尺（一二四・八cm）、体重は六・六二三貫（二十四・八kg）。一方、平成五年の岡崎市の六年生は、身長一四三・四cm、体重は三七・二kgである。当時の六年生は、今の二年生とほぼ同じ大きさである。

資料は、昭和二十五年で終わっているが、どの年度も共通した特徴として、トラホームと貧血が多いことが挙げられる。明治四十一年には、なんと七十四名中六十四名がトラホーム、二十一名が貧血と記されている。これは、食生活の貧困、衛生環境の悪さによるものであり、時代を反映した記録と言えるだろう。

題字	岡崎市長	中根　鎮夫
タイトルバック	竜海中	畔柳とも子
表紙写真	恵田小	田中　忠康
表紙詩	恵田小	浅野　政人
カット	竜美丘小	長坂　博子

オアシス

大方の予想を裏切ってサッカー人気が定着してきた。プロ化の波も他のスポーツに波及し、ブームになっている。しかし、一見華やかなプロの世界も、現実は厳しい競争社会である。夢と現実が交錯するプロの一面を拝聴し、またグランパスの活躍が楽しみになった。

春光遅々とした中、冬を耐えてきたハルリンドウの蕾の一株を、メダカの水槽の傍に置いた。ある日、春風に誘われて二センチメートルに満たない薄赤紫色の可愛い十枚の花弁を見せた。藻をつっつく一年生メダカと毎日対話しているようで心が和む。

赤色や紺色、黒色のピカピカに光る大きなランドセルを背負って、一年生が登校してくる。その何とも不格好な姿に思わずほほえんでしまう。しかし、子供のあどけない表情を見ると、この子たちのために頑張ろうという気持ちがわいてくる。新年度の始まりである。

すくすくと成長を続ける現代っ子だが、高学年ともなるとダイエットを意識するそうだ。明治の子供が聞いたとしたら何と言うだろうか。豊かな時代に生まれた贅沢な悩みである。

それにしても、体重計に乗る新一年生の緊張した面持ちは、やはり愛らしい。

この本を

＊柔らかい発想　大前　研一
イースト・プレス　¥1500

＊清富記　水上　勉
新潮社　¥2400

＊子どもの光る街　山本　保
エディケーション　¥1000

＊ＴＶニュース　七つの大罪　ニール・ポストマン
クレスト社　¥1600

※言葉が輝くとき　辻　邦生
文藝春秋社　¥1900

13の講演記録をまとめた随想集である。言葉と生命がその根底をなしている。

筆者の言う幸福とは生命感が身体に輝くことであり、生命感を呼び寄せるのは言葉である。言葉こそ生命だと言える。

日常会話に詩や小説を交え、話が弾むヨーロッパ人に対し、以心伝心を旨とする日本人は話し下手である。情報洪水の中で、魂を揺さぶる重厚な言葉が姿を消している。筆者は、躍動溢れる言葉の輝きにより生の蘇りを図ろうとしている。